

らかじめふかくなげきて、たゞにもだしがたきまゝに、筆にまかせてしるしおき侍る。もし此ことの葉連りうせすして、世に取傳へて見る人あらば、かくいふ予を評じて世をいましむるとやいはん。又は世に諂ふとやいはん。其評する人のこゝろによるべし。樓綏がいへる、母よりいへば賢とし、妻よりいへば妬とするのたぐひなり。それはあながちに論ずる所にあらず。

享保辛亥のとし正月十三日、鳩巢老人駿臺の草の庵にして筆をとる。

一、室鳩巢の作詩

春初病中書懷 其一

一臥草堂春復還。鳳凰樓閣綵雲間。重輪曲々簫韶奏。萬歲聲々玉帛閑。天入陽和新雨露。地連襟帶舊河山。太平自古稱多士。此日應陪供奉班。

同 其二

家住駿臺十歲餘。新年風雪繞吾廬。身因多病辭朝會。門謝雜賓與世疎。老愧授經楊伯起。村非馱賦馬相如。東都今屬中興日。肉食幾人解讀書。

酬蘆世輔新年自東奧見寄二首。並依本詩韻次。  
九曲仙源河處尋。武陵洞口薛蘿深。滄江潮上春流滿。碧嶺雲來午景陰。近報英材人授簡。幾回文會士成林。却思語到群形外。盡日高談半不禁。

杜詩。巡簪欲共梅花笑。冷蕊疎枝半不禁。今此言無窮之理。終日高談不能禁當其半也。程明道云。道通天地有形外。

故人昨夜夢相尋。何事離居歲月深。窮巷掩扉春寂々。草堂高枕晝陰々。儒門賴子持文柄。師道愧吾老翰林。此日忽聞歌白雪。病中欲和奈難禁。

一、門下秀才の儀室鳩巢來狀

大地兒の御書中の御書中  
氣宇も大方平生の通に罷成候間、少しも御氣遣有間敷候。其故當月廿日過より講談も始申筈に候。去年より多田儀八、太極圖を望申候て讀懸置候。是を今少に成し候間講可申と存候。其外論語も衛靈公篇迄講懸申候。只今手足叶不申、袴も人に爲着てもらひ、講席迄罷出候も前後より人に被扶候て、漸くいざり出申躰にて殊の外難儀に候得共、廢人に罷成何の役にも立不申候。責てかやうの儀にて人の益にも

成申候へば、存命のしるしと存候。夫ともに氣配弱り候へば不罷成候へども、精神は替儀も無之候故、死申迄は成だけ勤申覺悟にて御座候。只今江戸・京都の學、邪說流布大筋を取違、後學を誤り申候。もとより大度類を一本にて支へんと欲する様成事に候得共、老夫をば年齢故少々人も信じ申候故、責て少し成とも正學の筋、門下に殘申候へば本望に存候。只今門下五六輩、篤志の人も見え候得共、いまだ學力無之、末頼もしく存には見及不申候。然共右の數輩は、大筋は取そこなひ申間敷候。就其候ても芦孝七郎、偏地に居申儀をしき儀に存候。此人は息災に無懈怠勤申候はゞ成就難量候。さては貴殿にて候間、随分自當候て段々進益候様にと願申候。不入儀ながら與風筆に任せ候。一つは貴殿御安堵のため、自筆にて如此に御座候。恐々謹言。

二月十四日

直 清

一、中村克正の松雲公御夜話

中村典膳克正は、久敷松雲公の御近侍に奉公し御心安被遊候故、御平生御物語にて外人の未承事、又は慥成古き物語等凡三百箇條餘令筆記候。御薨逝の後一冊に調之、當君へ

上り候處御感悅に思召候。但外へは不出様に可相心得旨、御親翰を以て被仰出候に付、副本は其家に有之候得共不許傳觀候。親子朋友等へ其内の儀物語には被仕候。或時被仰候は、本朝にて賢人・君子とも稱し候人は誰々と存候や、世上にても稱し候儀覺候て可申上旨に付、上古の儀は不奉存候。中世以後は聖德太子・小松の大臣・楠正成此三人の様に人も申候。私式も左様に存寄候旨申上候處、聖德太子を以て賢者とすべき事何とも不心得候。吾國王家の禮儀をも亂し、威徳も衰へしは皆此太子より起りしもの也。就中御即位の時佛法を取難へ、高御座へ著御の時法華の文を誦しなど仕様なるわけもなき事も、多くは太子より始りぬれば賢君子の沙汰には難及。小松の重盛も一門の驕奢を嘆きて未亡の前に命を絶ん事を願ひ、其外あらぬ舉動多き人也。燈籠の大臣などと呼ばれ候事など一事も取に不足。何とぞ一息にてもながらへ、畢竟の時を命を君へ奉り、忠死をも可被遂事に候。楠事は誠忠臣と可申、只湊川の一死今少しはやく、是のみ残念に思召候旨御意被成候由。克正謹

一、北京へ鳳凰來儀の説